

都市居住高齢者の幸福感

— 家族・親族・友人の果たす役割 —

1. 目的
2. 幸福感の測定
3. 幸福感の属性による差異
4. 幸福感と家族構成
5. 近隣や友人との交際と幸福感
6. 親族か友人か…重回帰分析による検討
7. 結論と考察

直井道子*

要 約

子供との同居や子供との交流は高齢者の幸福にとって必須の条件であろうか。本稿では P. G. C. モラル尺度を用いて、幸福感の規定要因を探った。分散分析では、子供との同別居、子供の有無、子供との交流によってモラル得点に有意差はみられず、配偶者の有無、世帯収入、健康度、男性ではこれに加え、別居子と会う頻度、就業の有無、友人との電話頻度でのみ有意差がみられた。基本属性と家族構成、親族交際頻度、友人交際頻度を説明変数として男女別に重回帰分析を行ったところ、男女とも健康度が重要であるほか、男性では友人との交際、女性では世帯収入と親族との交際がモラルに有意な影響をもつといえる。

1. 目 的

本論は大都市居住高齢者の生きがい、幸福感などにとって、配偶者、子供などの家族が果たす役割をあきらかにすることを目的としている。戦前の家制度のもとでは、長男は老親と同居して扶養することが当然の義務とみなされてきたことは周知の事実である。この規範は日本人に強く内面化されており、戦後から現在に至るまでの急激な社会変化にもかかわらず、高齢者の子供との同居率は緩やかにしか低下してこなかった。「子供と同居することこそが日本の老人の幸せ」だといこ

とは自明のこととされて、老人の側も子供の側もそれを信じてきたように思われる。そこで多くの子供は、かなり無理をして同居をしたり、それができない場合には罪の意識を感じたりしてきた。だが、はたして、高齢者の生きがいや幸福感にとって子供との同居は不可欠なのであろうか。あるいは同居できなくても子供との行き来があればよいのだろうか。いや、それさえも必要がないということも考えられる。この疑問が本論の出発点である。

このような疑問が提出されるのは、現代の高齢者たちは、趣味をもち、友人たちと楽しい語らいをもって、それで十分幸せなようにも見えるから

である。それでもなお、子供たちとの親密な関係がなければ幸せではないなどということがあるのだろうか。たとえば、米国では、高齢者の幸福感にとって親族との交際よりも友人との交際の方が大きな影響力をもつといった研究結果が発表されて以来、高齢者にとって重要なのは「友人か、家族か」という議論が続けられてきた⁽¹⁾。そこで、日本の高齢者に関しても同じような議論を試みたい。日本のすべての高齢者とはいわないまでも、必ずしも子供との同居や交際が自己の幸福にとって不可欠ではないというようなタイプの高齢者が層として出現しはじめているのではないだろうか。もし、そうであるとすれば、どのような属性をもった高齢者が、そのような新しいタイプなのだろうか。本論ではこのような問題を追究する。

2. 幸福感の測定

高齢者の生きがい、幸せといったものは簡単にはとらえがたいと考えられる。したがってこれをどのように測定するかが、一つの大きな問題である。米国ではカトナーのモラール尺度⁽²⁾、ニューガルテンの人生満足度尺度⁽³⁾などが検討された後、最近ではP. G. C. モラール尺度⁽⁴⁾（フィラデルフィア・ジェリアトリックセンター・モラールスケール）が多く用いられている。日本でもそれぞれが翻訳され、検討されてきたが⁽⁵⁾、やはり最近ではP. G. C. モラール尺度が多く用いられている。多次元から幸福感をとらえようとしている点と、何よりもこの尺度が高齢者にとって比較的解答しやすいという利点のためであろうと考えられる。そこで、他の調査結果との比較可能性も考えて、我々もP. G. C. モラール尺度を用いることにした。ただし、本稿では次元ごとの分析は行わず、別の機会に委ねることとする。各項目ごとの地域別単純集計を表1に示したので、質問項目と回答を順にみていこう。質問は、当然のことながら、「はい」と答えるとモラールが高いような質問と「いいえ」と答える方がモラールが低い質問が混合している。そこで、表1では最初（左側）の選択肢が幸せでない、モ

ラールが低い回答、ふたつめ（中央）の選択肢が幸せ、モラールが高い回答となるように並べてある。

17の質問は米国での因子分析の結果によれば、3つの因子に分れるとされている。日本での因子分析の結果は調査によって差異もみられるため、とりあえず米国の3因子ごとに高齢者のモラールの状況を概観しよう。質問の1, 2, 6, 8, 10の5項目は、自分の老化をどのようにうけとめているかを示す項目である。これらの回答をみると、年をとるにしたがって人生が悪くなるとか役に立たなくなるとか思っている人は少なく、むしろ若いときより幸せだと受け止めている高齢者が多いことがわかる。ただし、質問8だけは、年をとるということは若いときに考えていたよりも悪いという回答が多く、ここに老いというものの深刻さも見える。

次に、質問4, 7, 12, 13, 16, 17は精神的安定・不安定にかかわる項目である。多数の高齢者が、精神的に安定しており、おろおろしたり、小さいことを気にしたり、すぐ腹をたてたり、眠れなくなったりはしないことがわかる。質問3, 5, 9, 11, 14, 15は孤独や不満にかかわる質問である。ほとんどの高齢者は、さびしくもなく、生きていてもしかたがないとも思わないし、家族との行き来や今の生活に満足している。ただし、14では生きることは厳しいという回答が多く、それを認識したうえで満足感であるようにも感じられる。

以上の簡単な検討から、高齢者の多くはかなり高いモラールを持っていることが結論できる。しかし、その前提には生きることは厳しいことであり、老いは若いとき思っていたより悪いものであると感じるなど、「高齢者にとっての人生」というものにたいしてしっかりした覚悟があり、その上での満足であり、高いモラールであるとの印象を受ける。

なお、いずれの項目においてもカイ二乗検定で有意な地域差はみられなかった。したがって、これ以後の分析では両地域を合計して取り扱っていく。

3. 幸福感の属性による差異

次にこれらの17項目を一つの尺度としてモラル得点を算出し、対象者の属性によってどのようにモラルに差があるかをみてみた。モラル得点は各項目でモラルが高い、より幸福感の高い方の回答(表1で中央の回答)に1点を与え、その数を足し上げたものである。したがってモラル得点は0点から17点まで分布する可能性がある。実際、我々の対象者でも0点から17点まで分布したが、0点の者は17項目のすべてに無回答であったので分析の対象からは除外した。モラル得点の分布状況は図-1に星印で示してある。点(ドット)で示した正規分布と比べると、対象者のモラル得点は高い方に偏っている。この点は平均に関して論じるときに注意しなくてはならないが、男女こみの平均点は11.8点であった。この値をこれまでに行われた調査研究と比較してみると、東京都区部在住の60歳以上の高齢者調査での平均点12.3点⁽⁶⁾、東京の団地居住の単身または夫婦世帯の高齢者の12.0点⁽⁷⁾と比べるとやや低

いものの、全国の60歳以上の高齢者調査の場合の11.2点⁽⁸⁾よりは高いということになる。

次に、モラル得点の基本属性(家族構成に関しては後にまとめて触れる)ごとの平均点を算出してみると表-2のとおりである。予想されるように、健康状態のよい人は悪い人より、世帯収入が高い人は低い人よりモラル得点が高かった。また、男女別で異なった傾向がみられたのは就労についてで、男性では就労者の方が有意にモラルが高かったが、女性では就労、不就労による差異はみられなかった。

注目すべき点は、男女別で有意差があり、男性の方が有意にモラル得点が高かったことである。これまでの日本での調査では、調査によって多少の差があるが、女性の方がモラルが低いという傾向はどの調査でも見られる⁽⁹⁾。この男女差が何によって生じているのか、たとえば収入や子供との同別居の差異からくるものではないのか、ということは追究する必要がある。

モラル得点に有意差がなかった属性も確認しておこう。年齢別にも、学歴別にもモラル得点に有意差は見いだされなかった。一定の年齢層に

モラル得点

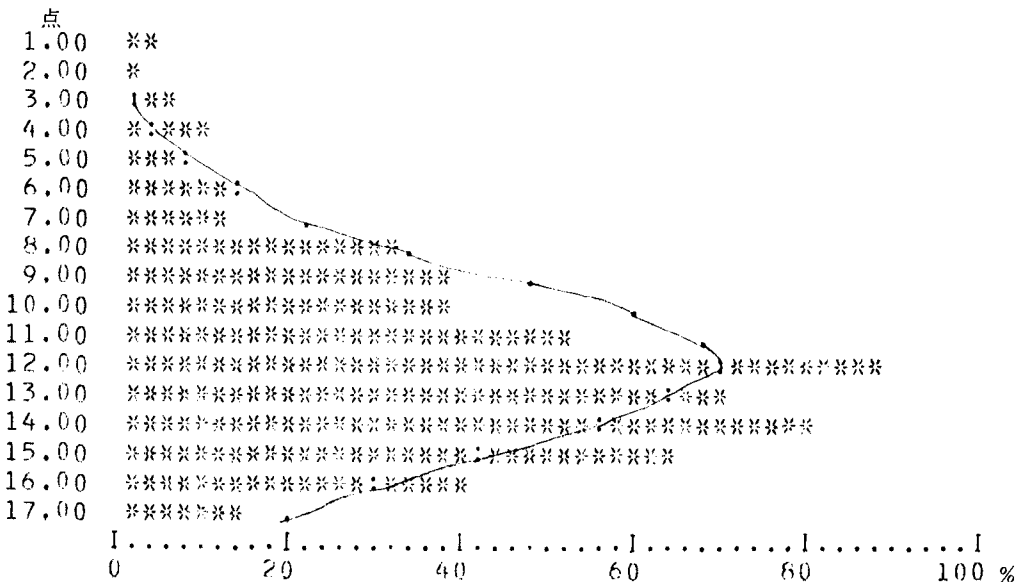


図1 モラル得点の分布

表2 基本属性別 モラルの平均点

属性		平均モラル得点										
性別	*	男12.1	>	女	11.5							
健康度	*	非常に健康	12.8	>	無理だめ	11.2	>	病気がち	8.4	>	寝ている	7.0
世帯収入	*	世帯収入700万以上	12.5	>	300万以上	11.7	>	300万未満	10.8			
就労	*	就労	12.2	>	不就労	11.3						
男	*	就労	12.5	>	不就労	11.2						
女		就労	11.8		不就労	11.3						
年齢		60-64歳	11.8		65-69歳	11.7		70-75歳	11.8			
学歴	男	低学歴	12.2		中学歴	11.7		高学歴	12.2			
	女	低学歴	11.2		中学歴	11.6		高学歴	11.2			

* P=0.05で有意差あり >は有意差のある場合のみ用いた

対象が限定されているため年齢差が現れなかったという見方もできるが、これまでの日本の調査では年齢が高いほどモラルが低いという傾向は認められていない。むしろパネル調査では年をとるとモラルが上がるという傾向さえ発見されている⁽¹⁰⁾ことを付記しておく。

以上が基本属性別にみたモラル得点であるが、実はこれらの属性は相互に深く関連しあっている。年齢と健康状態、就業状態は関連するし、就業状態と世帯収入も関連するだろう。そこで後に他の変数の影響を除去した関連をみていくことにする。

4. 幸福感と家族構成

さて、いよいよ、本論の主題である幸福感と家族の関連に移ろう。まず、家族構成（子供の有無、子供との同居、配偶者の有無）別のモラル得点を見てみたい。

表-3は家族構成別のモラル得点の平均点である。配偶者の有無別にみると、有配偶の者の平均モラル得点は無配偶の者より有意に高い。ただし、男女別にみると、有配偶無配偶間の有意差はみられなくなる。子供の有無別にみると、男性では子供のいない人の方がモラルが高い傾向さえみられ、女性では子供の無い人のほうがモラ

ルが低いがいずれも有意な差ではなかった。老後に子供がいないことは大変寂しいことのようにいわれているが、この尺度でみるかぎりでは差異はないということになる。子供との同居別にみると、男性の場合には、既婚子との同居者が最もモラルが高く、同居の子供のいない人が最もモラルが低いという予想された傾向がみられるが、有意な差ではなかった。さらに、女性の場合にはほとんど差異がみられない。

同居の家族構成をみると男女とも単身世帯のモラル平均得点は低い。しかし、必ずしも三世代同居のモラル得点が高くはないことは注目に値するだろう。少なくとも、このモラル尺度からとらえられる限りでは、「子供との同居こそが高齢者の幸せ」とはいえないということである。以上のことから、配偶者の有無ということが家族構成のうちで最も高齢者の幸福感に影響を与えており、それ以外の要因、子供の有無、子供との同居などはモラル得点でみるかぎりほとんど影響を与えていないと結論づけられる。

次の課題は、子供と同居していても子供との交流は高齢者の幸せに影響を与えているののではないか、ということを検討することである。表-5では子供と兄弟親戚をとりあげ、電話や行き来の頻度別にモラル得点の平均を算出した。その

表3 家族構成別モラル平均点

家族構成	平均モラル得点
配偶者の有無 *	配偶者有 12.0 (460) > 配偶者無 11.3(156)
子供の有無 男	子供無(23) 12.3 子供有(238) 12.1
女	子供有(265) 11.5 子供無(38) 11.0
子供との同別居	
男	既婚子同居(35) 12.8 未婚子同居(85) 12.3 同居子無(136) 11.8
女	既婚子同居(67) 11.6 同居子無(171) 11.4 未婚子同居(61) 11.4 (未婚子既婚子同居9、子供の配偶者のみとの同居2は除いてある)
世帯構成	
男	未婚子同居(74) 12.5 三・四世代配偶者無(41) 12.4 同 配偶者有(10) 12.2 夫婦 (110) 11.9 単身(11) 10.6
女	夫婦 (85) 11.8 未婚子同居(42) 11.8 三・四世代配偶者有(33)11.7 同配偶者無(58)11.1 単身 (62) 10.8

* P=0.05で有意差あり >は有意差のある場合のみ用いた

表4 親族交際頻度別モラル平均点

別居子と電話	交際頻度					
	ほぼ毎日	週に1-2回	月に1-2回	年に数回	ほとんどない	そのような人はいない
男	13.3(26)	11.9(74)	11.8(59)	13.1(7)	11.7(31)	12.0(65)
女	11.6(48)	11.8(90)	11.9(60)	11.4(11)	9.6(14)	10.9(81)
別居子と会い会話、						
男	13.1(36)	12.5(31)	12.0(81)	11.6(45)	8.7(6)	12.1(63)
女	11.8(35)	11.2(47)	12.0(81)	11.5(52)	10.3(9)	11.0(80)
兄弟親戚と電話						
男	12.7(7)	11.5(28)	12.3(99)	12.2(84)	11.5(39)	12.2(5)
女	12.8(13)	11.7(68)	11.4(118)	11.2(72)	10.9(26)	11.3(7)
兄弟親戚と会い会話						
男	11.6(15)	12.5(13)	12.1(57)	12.1(131)	11.9(40)	12.0(6)
女	11.6(8)	11.7(22)	11.5(88)	11.6(141)	10.3(37)	11.3(7)

交際頻度別にモラルに有意差があったのは「別居子と会い、会話」の男性のみ

表5 親族交際量別モラール平均点

親族交際頻度	親族なし(11)	頻度少(99)	頻度中(172)	頻度多(169)	頻繁(111)
平均モラール	10.8	11.5	11.7	12.0	12.2

P = .38

結果、有意差がみられたのは、男性の場合だけで、それも別居子との行き来の頻度に関してのみであり、その他の場合に関しては有意差は見られなかった。しかし、注意深く見れば、男性では兄弟親戚との行き来以外では「ほぼ毎日」の人のモラール得点が最も高くなっている。女性の場合にはこの点もあまり明確ではない。

ただし、ここで問題になってくるのは、ここで調査したのは別居の子供との交際頻度だけであるという点である。これまでにすでに日本の家族研究では、子供と同居の高齢者は別居の高齢者より、別居子との交際頻度が少ないという傾向が指摘されている⁽¹¹⁾。そのために別居の子供との交際頻度ではモラールに差異がでないということも有り得るので、子供との別居高齢者に限定して、男女こみで交際頻度をみてみたが、やはり有意な関連はみられなかった。

なお、これらの親族交際は相関を示したので、4種類の親族交際カテゴリーを合計した合成変数を作ってみた。「そのような人はいない」を除き、「ほぼ毎日」を4点、「週に1-2回」を3点、「月に1-2回」を2点、「ほとんどしない」を1点というように頻度には整数値を与え、ただ合計した。これを親族交際得点とよぶことにしよう。親族交際得点を、分布がある程度均等になるように分割し、これが相対的な親族交際の量を現わすと考え、これを親族交際量と呼ぶことにする。表-5で親族交際量別にモラールをみたが、これにも有意差はなかった。

5. 近隣や友人との交際と幸福感

家族構成や親族交際がモラールに影響を与えないとしたら、米国での研究のように友人などとの

表6 近隣、友人との交際とモラール

仕事仲間と個人的 会話	ほぼ毎日	週に1-2回	月に1-2回	年に数回	ほとんどしない	そのような人はいない
男	11.5(38)	12.5(35)	12.3(52)	12.0(56)	12.0(56)	12.2(40)
女	11.4(25)	11.3(15)	10.7(19)	10.4(18)	12.4(46)	11.4(181)
近所の人と会い会話						
男	12.5(78)	12.0(55)	11.8(31)	13.0(12)	11.7(80)	12.3(6)
女	11.6(109)	11.7(95)	11.3(30)	13.8(4)	10.7(62)	9.0(4)
友人、知人と電話						
男	14.2(17)	12.8(34)	11.8(59)	12.0(66)	11.6(75)	11.8(11)
女	12.5(25)	11.8(68)	10.7(78)	12.1(46)	11.1(68)	11.2(19)
友人知人と会い会話						
男	12.9(16)	13.0(29)	12.4(49)	11.9(87)	11.5(71)	11.9(10)
女	13.0(21)	12.0(52)	10.9(62)	11.7(80)	10.9(68)	10.8(21)

交際頻度別にモラールに有意差があったのは「友人、知人と電話」の男性のみ

表7 友人交際量別モラール平均点

友人交際頻度	友人なし(127)	頻度少(148)	頻度中(145)	頻度多(142)
モラール	11.4	11.9	11.5	12.4

P=.03

交際のほうがモラールに影響を与えているのかもしれない。そこで、職場や仕事仲間と個人的な話をする頻度、近所の人と会って話をする頻度、友人、知人と電話で話をする頻度、友人、知人と会って話をする頻度の4種類の交際頻度をとりあげて、その頻度別にモラールに差があるかどうかを調べた。その結果は表-6に示されている。交際頻度によって有意差がみられたのは男の場合の友人知人と電話で話す頻度だけであって、ほぼ毎日話す人、週に1-2回話す人などはモラールが高かった。また、男女合計では、友人知人との電話の会話頻度も、会っての会話頻度もモラールに有意差をもたらしていた。また、近所の人との会話頻度では、全体としてモラールに有意差はみられないとしても、女性の場合、「ほとんどしない」「そのような人はいない」人のモラールは著しく低くなっている。このように、近所の人や友人知人との交際頻度は、幸福感に多少の影響を与えているかに見える。

そこで、親族交際の場合と同様に、頻度のカテゴリーに得点を与えて合計し、近隣、友人知人との交際得点を算出することにした。これを友人交際得点とよぼう。ただし、仕事仲間との個人的な会話の頻度は、男性では「ほぼ毎日」の人のモラールはむしろ低いなど異なった傾向がみられる上、女性では仕事についていない人も多いことから、合計に加えなかった。友人交際得点を分布がある程度均等になるように分割し、友人交際量とよぶことにする。友人交際量別の平均モラール得点は表-7に示したとおりで、友人の交際量別に高齢者の幸福感には差があるといえる。

6. 親族か友人か…重回帰分析による検討

以上、高齢者の様々な特性ごとに幸福感に差異があるかどうかを、モラール得点の平均値をみることによって検討してきた。しかし、実は高齢者の特性は相互に深く関連しあっており、ある特性による差異がみられても、それはみせかけの差異で実はほかの特性による差異である、といった可能性がある。たとえば、女性で近隣交際頻度が低い者のモラールは著しく低かったが、もしかするとこの人々は健康状態が悪く、そのためにモラールが低いということもありうる。そこで、他の変数をコントロールしたときの各変数のモラールに対する影響をみるために重回帰分析を行った。

これまでの研究からモラールに影響を与える要因は男女で異なることが指摘されているので⁽¹⁰⁾、重回帰分析は男女別々に行った。その結果の標準偏回帰係数(ベータ)を表-8に示した。

なお表-9の男女各上段は、被説明変数をモラール得点、説明変数を健康状態、世帯収入、就業の有無、配偶者の有無、子供との同別居の5つとした分析の結果である。このような基本的な属性の中では、男性は健康状態、女性では健康状態と世帯収入だけが、他の変数の影響を除去してもモラールに対して有意な効果をもっている。

下段は上段の5つの説明変数に、本稿でとくに焦点としてきた親族交際と友人交際(ともに得点)を加えてみたものである。男女とも、この2つの変数を加えたことにより、重相関係数は上昇している。そして、男性では友人交際が、女性では親族交際がモラールに有意な効果をもっていることがわかる。なお、ここで分析に用いた親族交

表8 モラルの重回帰分析（標準偏回帰係数）

説明変数	健康	配偶者	同居子 有無	就業	世帯 収入	親族 交際	友人 交際	重相関係数
男モラル	.39**	.00	.06	.08	.06			.433
男モラル	.38**	.00	.08	.06	.05	.05	.14*	.460
女モラル	.29**	.05	.00	.03	.14*			.338
女モラル	.28**	.03	.02	.04	.15**	.12*	.06	.366

際得点、友人交際得点は合成変数であって、その数値の具体的な意味を説明しにくい点があるので、これらに変わって、別居の子供との電話の頻度と友人との電話の頻度を説明変数として投入した分析も試みたが、その結果は交際得点を用いた場合とほとんど同じであった。本稿のはじめに、「親族か、友人か、いずれとの交際がより高齢者の幸福感に影響をもたらすか」という問題設定をしたが、結論として男女で差があるということになる。男性にとっては友人、女性にとっては親族の交際の方がモラルを高める方向に作用するということである。

7. 結論と考察

高齢者の幸福感と関連が高い変数は、男女共通には健康度であり、女性ではこれに世帯収入と親族交際頻度が加わり、男性では友人との交際頻度が加わる、と結論できる。一般通念とは異なり、子供の有無、子供との同居などは少なくともモラル尺度で測定する限りにおいて高齢者の幸福感に影響を持っていなかった。

平均値の分散分析においては、このほかに、配偶者の有無でモラルに有意差が見られた。女性の場合、配偶者のいないことは世帯収入の低下につながり、それがモラルを低下させるという傾向があり、重回帰分析では配偶者の有無は有意な効果をもたなかったものと思われる。

以上はあくまでも、P. G. C. モラル尺度を用いた、地域在住の前期高齢者に関する分析から得られた結果である。より高齢になれば、男性

でも友人交際より親族交際の方が重要になってくるかもしれないし、より高齢者を対象に含めれば、年齢もモラルに対して効果をもつかもれない。さらに、今回の分析では、モラル尺度を因子分析した次元別の分析は手掛けていない。これも今後の課題として残される。

注

- 1) たとえば、Adams, B.N., Interactions theory and the social network, *Sociometry* 30(1) pp. 64-78 1967以来である。
- 2) Kutner, B. et. al., *Five Hundred Over Sixty*, Russel Sage Foundation 1956
- 3) Neurgarten B., Havighurst, R. and Tobin, S., The Measurement of Life Satisfaction, *Journal of Gerontology*, 16, 134-143, 1961
- 4) Lawton, M.P., The Dimension of Morale in Kent, D (ed.) *Research Planning and Action for the Elderly*, Behavioral Publications, New York, 1972で22項目の尺度として提案され、Lawton, M.P., The Philadelphia Geriatric Center Moaral Scale; A Revision, *Journal of Gerontology*, 30, pp. 85-89 1975で17項目へと修正された。本稿で用いるのは17項目の修正版である。
- 5) カトナーの尺度は7項目の尺度であったが、東京都老人総合研究所の定年退職者調査で5項目にして用いられた。袖井孝子「モラル・スケール」東京都老人総合研究所『定年退職に関する長期的研究』1976で分析結果が報告されている。その後、10年後のパネル調査でも同じ尺度が用いられ、西下彰俊「モラルの現状」東京都老人総合研究所

『定年退職に関する長期的研究(2)』1986, 西下彰俊「中高年期におけるモラルの現状と変化」『社会老年学』No. 25 pp. 30-43, 1987などがある。内容的にはP. G. C. モラル尺度に類似しているが、一次元であるとされている。

ニューガルトンの人生満足度尺度(Life Satisfaction Index)を用いた研究を積み重ねてきたのは和田修一で、和田修一「社会的老化と老化への適応—人生満足度を中心として」『社会老年学』No. 11 pp. 3-14 1979を始め「人生満足度尺度の分析」『社会老年学』No. 14 pp. 21-35 1981などがある。この尺度も多次元である。

P. G. C. モラル尺度は浅野仁・谷口和江・前田大作・古谷野亘・坂田周一(順不同)らが、老人総合研究所勤務当時精力的に研究を行った。いずれも『社会老年学』(11号, 14号, 20号, 27号, 28号, 30号)に発表されている。ただし、対象が限定されている研究やモラルの変化に焦点をあてた論文も多く、地域居住老人のモラルやその規定要因が焦点となっている論文は6)に参

照するとおりである。

- 6) 谷口和江・前田大作・浅野仁・西下彰俊「高齢者のモラルにみられる性差とその要因分析」『社会老年学』No. 20 pp. 46-58 1984
- 7) 直井道子「モラルと社会意識」東京都老人総合研究所『団地居住老人の生活と意識』1989
- 8) 前田大作・野口裕二・玉野和志・中谷陽明・坂田周一・Jeresy Liang「高齢者の主観的幸福感の構造と要因」『社会老年学』No. 30 pp. 3-16 1989
- 9) 区部在住高齢者の場合 男11.6 女11.2
全国調査の場合 男11.6 女10.9
団地居住の単身, 夫婦世帯の高齢者の場合 男12.4 女11.8
- 10) 前田大作・坂田周一・浅野仁・谷口和江・西下彰俊「高齢者のモラルの縦断的研究」『社会老年学』No. 27 pp. 6 1988によれば、平均的には年をとるとむしろ、モラルは上がる傾向さえ見られた。
- 11) 袖井孝子「老人扶養と家族関係」森岡清美編『新・家族関係学』中教出版 1974 p. 268

Key Words (キー・ワード)

Subjective well-being (主観的幸福感), PGC morale scale (モラル), Family networks (親族交際), Friends (友人交際), Family structure (家族構造), Urban elderly (都市老人)

SUBJECTIVE WELL-BEING OF THE URBAN ELDERLY

Michiko Naoi*

*Tokyo Gakugei University

Comprehensive Urban Studies, No. 39, 1990, pp.149-159

Does living or associating with children contribute essentially to the subjective well-being of the elderly? In this report, I have searched for the determinants of well-being, using the P.G.C. morale scale. Analysis of variance revealed that living with, having, or associating with children does not significantly alter morale scores; only spouse, household income, and state of health affect the score significantly. For men, factors like the frequency of seeing separated children, job, and the frequency of talking to friends on the phone were significant.

I have also conducted multiple regression analysis for both sexes, with demography, family-type, frequency of association with relatives, and frequency of association with friends as explanatory variables. Results showed that the state of health was important for both men and women; associating with friends was important for men, household income, and associating with relatives ranked high for women.

1 Purpose

The purpose of this study is to investigate the effects of the family networks on the level of subjective well-being of the elderly.

2 Data

The data are from the random sample survey of urban elderly living in two parts of Tokyo. The subjects are 564 persons aged 60 to 75 years old.

3 Methods

P.G.C. Morale Scale developed in Philadelphia Geriatric Center is used to measure subjective well-being.

4 Results

- (1) 3 demographic variables have significant effects on the level of the morale score of both sexes (table 2).

These variables are sex, health and income of the households. Age and education do not have statistically significant effects.

- (2) Only 1 variable concerning family structure has statistically significant effects on the level of morale score.

That is whether the respondent has his/her spouse or not (table 3). The variable, living with his/her child or not has no statistically significant effects.

- (3) The frequencies of the contacts with family members and relatives do not relate to the level of the morale score.

However, the frequencies of the contacts with friends has statistically significant effects (table 5, 7).

- (4) As a result of multiple regression analysis, we find sex differences in the variables influencing on the subjective well-being of the elderly (table 8). For men, health and the frequencies of the contacts with *friends* have significant effects. For women, health, income of the household and the frequencies of the contacts with *relatives* have significant effects. We can conclude that the family networks has still important role in the lives of old women.